

# 陳舜臣さんを語る会通信

NO.21 Oct. 2020

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2020年10月15日

## 陳舜臣『曼陀羅の人 空海求法伝』と司馬遼太郎『空海の風景』

まず、『曼陀羅の人 空海求法伝』（初出：読売新聞、1982年4月1日～83年7月13日）について記述し、そのあと、『空海の風景』（初出：中央公論、1973年1月～75年9月）を紹介します。先に執筆された『空海の風景』は、空海の生い立ち、出自から入定まで、ほぼ、全生涯に渡って記述されています。陳舜臣さんは、司馬の作品を当然、意識していたでしょう。そして、意図的に、入唐期、つまり舞台を中国、に絞ったと思われる。これなら、誰にも負けないとの自負があったのでしょうか。

以下、『曼陀羅の人』について、TBSブリタニカ版を使用し記述します。（編集委員 橘雄三）

TBSブリタニカ版

「あとがき」から引用

傍線は編集委員の加筆

（ブリタニカ版表紙）



空海を描くのに、その高く、そして深いたましいにより添い、密着するのは至難である。この作品は読売新聞に連載したが、私は空海が入唐し、密教をつかむ時期に照明をあてる方法をえ

らんだ。私としては、それ以外に書きようはなく、読者の人たちにも、空海入門として最もわかりやすいであらうとおもった。

書いているあいだ、私は自分の心を空海に近づけている気がして、法悦のごときものをかんじた。一つの作品を書きあげたあとは、たいてい悔いが残るものだが、この『曼陀羅の人』についてはそれがなかった。

慈悲深いたましいが、洗いながしてくれましたのであろう。この作品を書き終えて、つぎの一律を得た。「有感」（感有り）とでも題しておこう。

遍照偉才絶世奇 遍照の偉才は絶世の奇

波濤万里務求師 波濤万里、師を求めんことを努む

随縁駐錫青竜寺 縁に随って錫を駐む青竜寺

灌頂登壇白月姿 灌頂、登壇すれば白月の姿あり

移得大唐真面目 移し得たり大唐の真面目

兼撃天竺佛経規 兼ねて撃ぐ天竺佛経の規

千年海外無弘法 千年海外に弘法無く

留学徒西換骨時 留学は西よりする換骨の時

千数百年前、遣唐使に従って多くの留学生が東から西のかたにむかった。いまは西の中国から日本に留学



『高野大師行状図絵』第2巻「大師御入唐事（部分）」（鎌倉時代）重要文化財 船の後部、一段高くなったところに、袈裟を着け坐しているのが空海。（所蔵/高野山地蔵院）

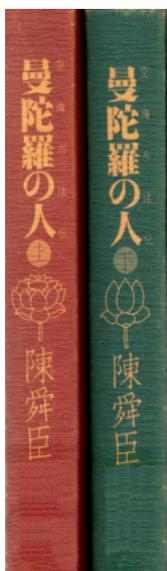
生が来ている。遣唐留学生のことを書きながらも、私には深い感慨があった。晩唐の李商隱の句に、

—— 換骨、神方、上薬通ず

というのがある。人の病をいやすのに、神の如き処方として、骨をいれ換えることがあったと考えられたようだ。空海の時代、日本は律令や仏法という換骨治療をおこなったが、いま中国はそれをおこなおうとしているのだろうか。

大きく、長い、歴史のうねりを、私はたえず心にかんじながら書き進めたのである。

一九八三年十一月 陳舜臣



（ブリタニカ版背表紙）

## 『曼陀羅の人』時代背景、空海の辿ったコース、主な登場人物

### 《 1. 時代背景》

#### 平安初期の天皇

桓武 在位 781 - 806

平城 在位 806 - 809

807. 11 伊予親王の変 謀反のかどで自害

嵯峨 在位 809 - 823

810. 9 薬子の変 平城天皇の復位を謀り自殺

淳和 在位 823 - 833

仁明 在位 833 - 850

#### 空海入唐のころの唐朝皇帝

右の登場人物表の「唐歴代皇帝」を見て下さい。

### 《 2. 遣唐使および空海の辿ったコース》

4隻で出発したが、嵐に遭い、第3船と第4船は遭難、中国に着いたのは、正使、橘逸勢、空海らの第1船と最澄らの第2船であった。第1船は、肥前を出て35日、福州長溪県赤岸鎮に漂着した。第2船は、漂流54日で、明州（寧波）にたどり着いた。

空海は、下図のルートで長安に向かう。最澄は、体調優れず、長安へ向かう一行と離れ、休養の後、明州に近い天台山に赴く。



福州から南平までは閩江を遡る船旅。ところで、上図では、古都コースは陸行だが、陳舜臣『曼陀羅の人』では、「開封をすぎると、鞏県のあたりから黄河にはいり、さらに渭水の流れにさかのぼって長安にむかう」と記述されている。

### 《 3. 主な登場人物 》

空海 774-835	804年、21歳で留学生として唐に渡り、長安滞在わずか一年三ヶ月という短期間で、恵果大阿闍梨から大唐密教最高位の阿闍梨位の灌頂(認可式)を受ける。
藤原葛野麻呂	ふじわらのかどのまる。遣唐大使
橘逸勢はやなり	空海と一緒に入唐した留学生。三筆の一人
とちえん 杜知遠	道教の僧。山岳修行の経験を持つ。空海が帰国するまで深い縁を持つ
りくこうぞう 陸功造	少年のころ、不空三蔵に仕えたことのある七十歳の老人。空海と深い縁を結ぶ
えんさいび 閻濟美	福建観察使(民政、軍事の長官)。空海の才能を見抜く
ばそう 馬摠	閻濟美から遣唐使一行を長安に引率するよう頼まれるが、空海の書と文の才能を見抜き、空海を長安行きメンバーに加えるよう具申
ふくうさんぞう 不空三蔵	仏教の最後の形ともいわれる密教を唐代の中国にひろめ、玄宗、肃宗、代宗と三代の皇帝に師と仰がれた
おうがく 王鏐	空海一行が揚州でもてなしを受けた淮南節度使兼揚州大都督府長史として実力を持つ大富豪。長安・永寧坊にも大邸宅あり
揚州鴛鴦楼 三名花	えんおうろう。尚玉、尚珠、尚翠
おうぶんきょう 王文強	揚州都督(軍政を統べる長官)府司馬。三名花を皇太子に献上するよう王鏐にすすめる
おうしゅくぶん 王叔文	寒門出身であるが、特技を生かし、碁の名手として皇太子李誦(のちの順宗)の相手をし、無二の側近となる。のち、翰林学士となり政治改革をめざす
おうひ 王伾	書の大家。皇太子(順宗)に書を指南し、王叔文とともに二王といわれた政治家
唐歴代皇帝	⑥玄宗、⑦肃宗、⑧代宗、⑨德宗、⑩順宗、⑪憲宗。空海の入唐は⑨⑩⑪の時代。805年には、德宗、順宗の二人が崩御
ようちゅう 永忠	日本人留学生。三十年間、唐の長安に滞在し、声明を学ぶ
けいか 恵果大阿闍梨	不空三蔵の高弟。密教の二つの系統である金剛頂経系、大日経系双方の奥義をきわめた高僧。自分の後継者として空海をえらぶ
あんさっぽう 安薩宝	薩宝は在長安西域胡人を管理する官職のこと。空海の求めに応じて祓教(ゾロアスター教)の教理を説く
はんにゃ 般若三蔵	天竺の声明、梵文にすぐれたインド僧。空海に「恵果に会う前に自分の世界を広げろ」と忠告、その機会をあたえる
牟尼室利三蔵	むにしりさんぞう。梵文にすぐれたインド僧
なんてんばらもん 南天婆羅門	牟尼室利三蔵の高弟。師に代って空海に梵文を教え、「理趣教」を説く
きんき 金起	密教の僧・不可思議の孫弟子であったが、還俗し絵師となる。尚玉と同棲。空海に請われて曼陀羅を画く
とゆう 杜佑	政治家で学者。詩人杜牧の祖父
りゅううしやく 劉禹爵	柳宗元とともに政治の改革に力をそそぐ
柳宗元	りゅうそうげん。礼部(教育、儀礼)員外郎
ぎみょう 義明	恵果大阿闍梨の高弟
しんこうごう 沈皇后	代宗の正妻、德宗の生母。安祿山の乱ののち、行方不明となる

## 密教を持ち帰るとはどういうことだったのか？

### 《 1. 空海、恵果に会うまでの準備》

空海が長安にいたのは、804年12月末から806年3月までの、わずか一年数ヶ月です。この短期間にどのようにして阿闍梨位を授けられたのでしょうか。

空海が長安で、王叔文と出会った時の会話です。王叔文は碁の名手として皇太子(のちの順宗)の相手をし、無二の側近となっていた人物です。

『曼陀羅の人』から引用します。下線は編集委員。

「あなたは奇妙な碁を打たれるときいたが」と、その男は訊いた。

「お耳にはいりましたか」

「諸方の人が集まった船内で、すこし変わったことをすれば、すぐに話の種になります。それはよくご存知であろうが、なにが目的でしたか？」

「貧道(僧の自称)は、密教をできるだけ早く日本に持ち帰らねばなりません。そのためには、ほうぼうに知己を得て、便宜をはかってもらうのがよろしいかと存じまして」(略)

留学期間をできるだけ短縮するために、密教に有効に接近しなければならぬ。その戦術として、空海は自分を目立たせ、便宜を得る手がかりをつかもうとした。それを王叔文は見とおしていたのだ。

また、王叔文はこうも言った。

「あなたはひとに、自分の思いどおりのところに石を打たせる才能があるときいたが…」

下線部分、密教に接近するとは時の阿闍梨、恵果和尚に会うことです。しかし、空海は、このような小細工だけに頼ろうとしたわけではありません。中国語に磨きをかけ、多くのお経を読み、サンスクリット語を習得するなど、恵果に会ったとき、恵果のすべてが吸収できるだけの自分にする努力をしていたのです。長安での日々はとても忙しかったのです。

### 《 2. 空海、恵果との出会いから恵果入寂まで》

「我、先より汝が来ることを知りて相待つこと久し。今日、相見ゆること大いに好し、大いに好し。報命(寿命)竭きなんと欲すれども、付法に人なし。必ず須らく速かに香花を弁じて灌頂壇に入るべし」(『御請来目録』)

『御請来目録』 ■空海が帰朝後、持ち帰った經典、仏画、仏像、仏具などの品目を朝廷に献上した目録。これには、目録と共に受法の経緯も記されていた。

恵果は空海の来るのを、まだかまだかと待っていた、待ちかねたというのです。阿闍梨位が授けられ

るまでの流れはつぎのとおりです。

6月 青竜寺を初めて訪問する

6月13日 胎蔵界灌頂を受ける

灌頂壇上の胎蔵界曼荼羅に投華得仏。大日如来

7月上旬 金剛界灌頂を受ける

金剛界曼荼羅に投華得仏。大日如来

8月10日 伝法阿闍梨位の灌頂を受ける

灌頂名は遍照金剛。この時は投華の儀式なし

12月15日 恵果和尚入寂

空海は、密教世界の王ともいべき第七祖恵果阿闍梨から阿闍梨位を授けられ、第八祖阿闍梨となりました。

このあたりの状況を司馬遼太郎さんは『空海の風景』で次のように記述しています。

「恵果の空海に対する厚遇は、異常というほかない。空海を一目見ただけで、この若者にのみ両部をゆずることができるかと判断し、事実、大いそぎでそのことごとくを譲ってしまったのである。空海は日本にあってどの師にもつかず密教を独習した。恵果は空海を教えることがなかった。伝法の期間、口伝の必要なところは口伝を授け、印契その他動作が必要なところは所作を教えただけで、密教そのものの思想をいちいち教えたわけではなく、すべて空海が独学してきたものを追認しただけである。」

投華得仏 ■『曼陀羅の人』より引用します。

空海が最初に受けた灌頂は、胎蔵のそれであり、壇上にひろげられたマンダラには、四百十尊の仏・菩薩がえがかれていたのである。

灌頂を受ける者は、目かくしをされ、花をもって壇上のマンダラにむかってそれを投げる。

花はいずれかの仏・菩薩のうえに落ちる。その落ちたところの仏・菩薩が、灌頂を受ける人と縁があったわけなのだ。(略)これが、投華得仏(花を投げて仏を得る)なのだ。

空海は二度とも、花は大日如来の上に落ちました。



青竜寺の「空海真言密教第八祖誕生」碑  
ウエブサイトより

## 万能の人 空海 帰朝後の空海と最澄

### 《 1. 『曼陀羅の人』いきなりの山場<sup>やまば</sup>》

小説は、空海たちが乗った第1船が福州長溪県赤岸鎮に漂着したところから始まります。

そしていきなり山場となります。漂着地の地方長官・福建観察使閻濟美への嘆願のやり取りがそれです。大使藤原葛野麻呂は、観察使閻濟美あてに三度、嘆願書を書くも反応がありません。四通目を空海が代筆し、事態が打開されます。

「馬先生、これをごらんになってください」

観察使は読み終えた書状を、馬摠に手渡した。遣唐大使朝臣賀能の名による四通目の嘆願状である。

これまでの三通とはまるでちがった、気韻が行間に溢れるような文章であった。しかも、躍動感がみなぎっている。

文章だけではない。その文字がみごとであった。

(中略)

賀能啓す。高山、澹黙(静かに黙っている)なれども、禽獸、勞を告げずして投帰し、深水言わざれども、魚竜、倦むことを憚らずして逐い赴く。

(中略)

これにはじまる文章は、『性靈集』に収められて現存する。数多い空海の記事のなかでも、とくに格調の高いことで知られている。

「日本の大使が書いたのですか。これは驚いた。我が唐の文人で、これに匹敵する文章を作る人が、いったい何人いるのでしょうか。…私の知るところでは、陽山(広東)に流されている韓愈くらいしか思いあたりませんね。…うむ」

馬摠は唸った。

『性靈集』 ■序文によれば、弟子真濟は、師空海が一切草稿を作らず、その場で書き写しておかなければ作品が失われてしまうため、空海作品を後世に伝えるべく、自ら傍らに侍して書き写し、作品を収集した。そして、これに唐の人々が師とやりとりした作品から秀逸なものを選んで加え、『性靈集』10巻が編纂された。この他、空海が入唐時から、将来の文集編纂を企図して自らの作品の写しを取っていたほか、最終的な編纂作業にも関与していたともいわれている。

### 《 2. 最澄はどこでどうしていたのでしょうか》

最澄(767-822)は桓武天皇の帰依をうけ、宮中であって内供奉として、仏典の講義などをつとめていました。入唐求法の還学生<sup>げんがくしゅう</sup>に選ばれ、通訳の義真を連れ、第2船に乗船します。留学生<sup>るがくしゅう</sup>の空海より、格段に身分が上でした。

最澄が乗った第2船は、空海らの第1船より長く漂流、それでも陰暦9月上旬、明州(寧波)に到着します。最澄は、長安を目指す一行には加わず、天台山上に登り、最新の天台教学や達磨禪を学び、さらに、越州(今の紹興)に赴き、竜興寺<sup>じゆんぎやう</sup>の順晧から密教の灌頂を受けました。805年5月、藤原葛野麻呂一行と共に帰国、7月入洛。

### 《 3. 桓武天皇の崩御 と 空海VS最澄 》



空海



最澄

越州(紹興)の船着き場。明州(寧波)行きの船を待つ空海に万寿尼院の老尼から、桓武天皇崩御を知らせる文が届く。『曼陀羅の人』から引用します。

桓武天皇に信頼されていたのは最澄である。最澄禪師も皇室の力を背景に、密教の布教を考えていたかもしれない。

新しい天子は、いまのところ白紙であるはずだ。最澄は長年の信頼関係を失って、これまでどおりというわけにはいかないだろう。

皇室の信頼を得るにも、実力が大きくものをいう。天子の死を好機とするのは憚られるが、じっさいのちからをもつ空海にとって、情勢はよくなりつつある。(中略)

(日本の密教は、この空海を中心にして、うごくことになっているのだ。…)

空海はそう信じた。

帰朝後、二人には宿命の溝・対立が待っています。



『虚往実帰』<sup>きやうじつぎ</sup> むなしく往きて、満ちて帰る  
『性靈集』、原典『莊子』



# 空海年譜

## 空海の歩み 生涯年表

774年

讃岐国(現在の香川県)に生まれる。  
一説では畿内説もある。

791年

都で大学に入学。のちにひとりの沙門(修行者)に出会い、虚空蔵求聞持法を学び、山岳修行に入る。大学は2年余りで退学。

虚空蔵求聞持法 ■虚空蔵菩薩に向かつて、真言を一日一万回、百日間唱える修行。

阿波国大滝嶽(たいりゆうがだけ)や土佐国室戸崎で修行に励む。室戸崎では、明けの明星が口中に入る(虚空蔵菩薩と一体化する)という神秘体験をする。(『御遺告』)



室戸岬御厨人窟

797年

『聾瞽指帰』を著す。  
宗教的寓意小説。仏教・儒教・道教を比較、仏教の優越を説く。のち一部改訂し、『三教指帰』と改題

804年

東大寺で得度受戒したのち、遣唐使船で入唐。(私度僧から官度僧に)

805年

恵果阿闍梨のもとで密教を学ぶ。

806年

恵果阿闍梨の死を機に帰国。大宰府の観世音寺に滞在。

809年

平安京に移り、高雄山寺(神護寺)に入る。最澄との交流が始まる。

810年

高雄山寺で国家鎮護の修法を行う。

812年

高雄山寺で最澄らに金剛界結縁灌頂、胎藏界結縁灌頂を授ける。



神護寺

813年

最澄の『理趣釈経』借覧の申し出を断る。

816年

修禪の道場建立のため上表し、嵯峨天皇より高野山を下賜される。

821年

満濃池の修築別当として、讃岐国に赴く。

823年

嵯峨天皇より東寺を下賜される。

827年

大僧都に任ぜられる。

828年

綜藝種智院を開設し、庶民に教育の門戸を開く。

834年

宮中で真言法(御七日御修法)を修す。

835年

高野山にて入定。

921年

醍醐天皇より弘法大師の諡号を賜る。

補足 ■最澄(767~822)

桓武天皇の帰依をうけ、宮中であつて内供奉として、仏典の講義などをつとめていた。入唐求法の還学生(げんがくしょう)に選ばれる。通訳の義真を連れ、第2船に乗船。空海は期間20年の留学僧として入唐。第1船に乗船。

空海が乗った第1船は8月、福州赤岸鎮に漂着。最澄が乗った第2船は9月明州に到着。天台山に登り、最新の天台教学や達磨禪を学び、さらに、越州(今の紹興)に赴き、龍興寺の順晁(じゅんぎょう)から密教の灌頂を受ける。

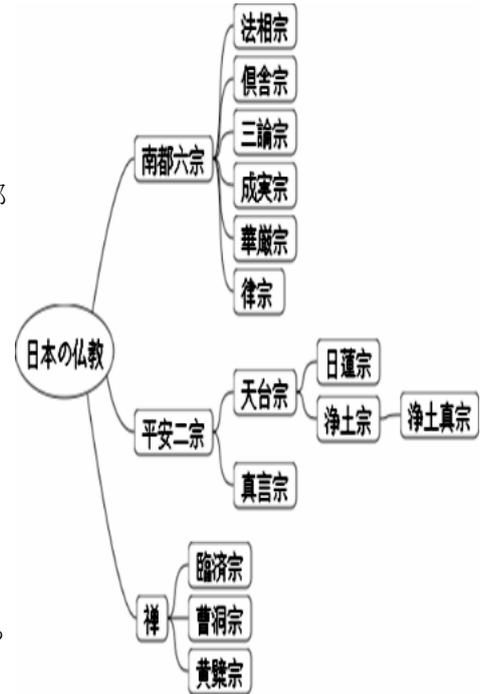
805年5月帰国、7月入洛。

別冊宝島『空海 風信帖の謎』より引用加工

# いくつかの補足 1. 日本の仏教 2. 朝廷が空海に期待したもの

## 《 1. 日本の仏教 》

飛鳥時代：蘇我馬子・聖徳太子が仏教支持…鎮護国家、皇族の息災  
 奈良時代：南都六宗…鎮護国家、皇族の息災 / 官寺、私寺  
 律宗/鑑真が招かれ僧侶に戒を授けた  
 平安時代：桓武天皇/寺・僧の政治への影響力を避けるため平安遷都  
 仏教は朝廷が直に管理。  
 最澄・空海に入唐させ、新しい仏教を学ばせ、奈良の旧仏教に対抗させようとした  
 桓武天皇は新しいもの好きで、中国の新しい仏教である密教についての情報も持っていた  
 鎌倉時代：鎮護国家、皇族の息災か民衆の救済へ  
 また、禅宗が武士に広まる  
 日蓮宗/「何妙法蓮華経」  
 浄土宗・浄土真宗/「南無阿弥陀仏」



■「最澄が、法然、親鸞、日蓮等の多くの連鎖反応のいとぐちとなったのにたいして、空海は孤立して見える」（上山春平著『空海』）

## 《 2. 密教とはなにか？ 師資相承 と 即身成仏 》

本来、密教は「文字によらない教え」を指します。顕教（法相宗など従来の大乗仏教）では、經典類の文字によって全ての信者に教えが開かれているのに対し、密教は、秘密の教義と儀礼を師資相承（師から弟子へと対面で伝えていくこと）によって伝持します。だから後、最澄が、空海に、次々經典の借用を申し出、ついには『理趣釈経』の借覧まで申し出ます。これに対し、空海は、「文はこれ糟粕（滋味を取り去った残りかす）、文はこれ瓦礫なり」といって断ります。空海は、經文を読んで済まそうとするやり方を拒否したのです。最澄は、密教の密教たるゆえんが理解できていなかったのでしょうか。

次は即身成仏ということについて、司馬遼太郎『空海の風景』から引用します。

「この新来の体系は究極の目的を成仏においている。しかもその密教的成仏たるや、他の仏教の体系なら人間が成仏するなど気が遠くなるほどに可能性が小さいにもかかわらず、密教にあってはそのまま即身の姿で成仏できる。唐の朝廷では、密教の壮大な形而上学や即身成仏などという觀念上の果実をよろこばず、ごく現実的な行者の呪力のほうをよろこんだ。」

## 《 3. 朝廷が空海に期待したもの 》

空海が生きた時代の正史、『日本後紀』に触れ、高村薫著『空海』は次のように記している。

「さて、それによると当時、日照り、長雨、地震、病気、不作などの不幸が続くたびに、朝廷は亀の甲羅を焼いてその割れ目から国家の大事を占う亀卜を行い、託宣を受け、物忌みをして神々へ捧げ物をしたことが頻繁に記されている。たとえば内裏で物怪が出たといっちは僧二十二人を召集して読経させ、後宮で犬が死んだといっちは大祓（おおはらえ）をする。これは、淳和天皇の厚遇を受けていた空海が、大僧都として朝廷に出入りしたころの話である。従ってももちろん空海も、この種の鎮護国家の法会を行っていたのであり、その記録が『後紀』には随所に残されている」

又、高村は「空海は朝廷に招かれて生涯で加持祈祷を51回もおこなったとされる」とも記している。

朝廷が空海に期待したもの、もう一つは、既成宗教の高僧にも密教の灌頂を受けさせ、朝廷のコントロール下に置くことでした。

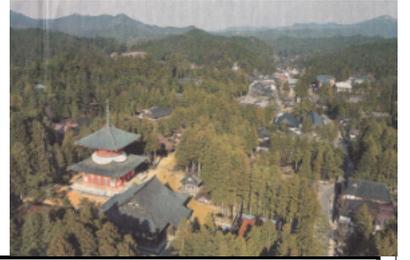


加持祈祷

## 司馬遼太郎『空海の風景』ダイジェスト

『空海の風景』は、全30章、空海の生い立ち・出自から、入唐、帰国、最澄との交流・溝、そして入定まで、ほぼ、全生涯にわたって記述されています。9章で遣唐使船に乗船し、18章で帰国します。入唐期間については、内容的に『曼陀羅の人』と重複するので、ここでは省略します。

まず、入唐までのいくつかの重要な場面のダイジェストです。



高野山

章

空海の風景 各章要点

【空海（774-835）は讃岐（今の香川県）の人】

【空海は入唐以前、既に、純粹密教へ飛躍する基礎をつくっていた】

6 797年、『聾瞽指帰（ろうこしいき）』（のち、一部改訂し、『三教指帰』と改題）を著すが、このころから、804年、東大寺で得度受戒し（官度僧になり）遣唐使船に乗るまでの七年間は謎。この時代、お経もちゃんと唱えられない乞食僧が多くいた。「若い空海がそういう連中と無邪気に群れて、陀羅尼をとなえて歩いているようでは、後年の空海は成立しなかったにちがいない…」。「もっともその乞食をしてほつき歩くという雑密の徒とその雑密の験にかれが魅せられていたからこそ、華嚴経にいたってかれは重大な段階に入ったにちがいない」。「この七年間のあいだにかれは山林において修行しつつも、（奈良大安寺の首座・勤操のはからいで、）諸寺を歩き、その経蔵に籠り、万巻の經典を読んだらしい」。「無名の青年である空海が、インドからはるかに遠い島国において、縮図的ながらも偶然インドとおなじ過程をたどりつつ、わずか七年で純粹密教へ飛躍するその基礎をつくったということは、信じがたいほどのことだが、しかし事実である」。「夢に人が立ち、告げていわく、ここに経あり、大毘盧遮那経（大日経）と名付く、…。そこで自分は随喜してくだんの経をさがしまわったところ、意外にも大和の国の高市郡の久米寺の東塔の下にあった」。空海は、大日経における不明の部分を知くために入唐を決意する。

【最澄（767-822）の入唐目的】

7-1 「最澄は、近江の人である」。「空海より七つ年上であった」。「十二歳前後で早くも出家した。十八歳で得度し、二十歳で受戒した」。「最澄は僧侶の任用試験である受戒を、東大寺の戒壇院でうけた。これによってかれは生涯官僧としての栄誉と俸禄を国家から保証されるということになるのだが、この試験に合格してからわずか三ヶ月後に官寺を去り、叡山に登り、山林にかくれてしまう…」。「ここに小さな寺をおこしたのがのちの比叡山延暦寺のおこりである」。最澄は日枝（比叡）の草堂で経を読み、自分の一大疑団を氷解してくれる經典、『法華経』にめぐり会う。『法華経』を諸経の根本に据えているのは中国の天台教学で、最澄は「自分のこの信念を裏付けてくれるものは、唐土の天台山にある」との思いに至る。

【最澄、前半生の幸運はじまる。それには、桓武天皇の異常なほどの肩入れが】

7-2 最澄にとって最初の幸運が舞いおりた。世間では無名の山にすぎなかった日枝（比叡）の山が、平安遷都によって都の鬼門にあたり、「山城に遷都するにあたって、桓武天皇とその側近が、さわいだ。鬼門には鬼門の手当をせねば…」。「山城盆地に新京の造営がすすみ、796年に大極殿ができる。そして、その翌年には最澄の私寺である比叡山寺がおどろくべきことに官寺になった。それだけではなかった。最澄自身が宮廷に召され、内供奉十禅師のひとりに加えられるのである。天皇のための侍僧とっていい。桓武は最澄に異常なほどの肩入れをした。唐へ渡りたい。最澄はその立場にいることによってその志を遂げようとした。

【最澄、幸運の時代に、暗い後半生の種が蒔かれる。それは、最澄の所為というには酷！】

7-3 最澄は平安京の郊外、高雄山寺で『天台三大部』の講演をした。これは、和氣清麻呂の子・和氣広世の招請という形を取り、奈良六宗の代表的学匠たちにも出席の要請が出ていた。「講演がおわると、すかさずそれを嘉賞するという勅詔が出」、さらに、和氣広世は聴聞した奈良六宗の長老たちにも感想を出させた。長老たちは、すでに嘉賞の勅詔が出てしまっている以上、くやしさを噛み殺し讃歎するほかなかった。「やがて最澄の後半生はかれら奈良六宗の復讐的な反撃のために暗いものになってゆく」。



現在の比叡山延暦寺（釈迦堂）

## 司馬遼太郎『空海の風景』ダイジェスト(続)

司馬遼太郎は、多くの作品においてそうですが、二者を対比描写することによって読者を引き込むのが巧みです。行きすぎて、例えば、『坂の上の雲』の二〇三高地における児玉源太郎と乃木希典のように、善玉と悪玉として、説き分けすぎる嫌があります。『空海の風景』における、空海と最澄の対比描写はどうでしょう。

### 【空海と最澄にたいする悪意の根はこのあたりか？】

7-4 最澄が高雄山寺で『天台三大部』の講演をしたのは801年11月、空海の青春における空白時代のことであり、「奈良の学匠たちとは別な観察と感情をもった。それは、より深刻といえる、あるいは別な悪感情といえるものであったかもしれない。(最澄とは、そういうやつなのか)。「空海は後年、最澄に対してつねにとげを用意した」。「最澄に対する悪意の拒絶や、痛烈な皮肉、さらには公的な論文において最澄の教学を低く格付けするなどの、いわばあくのつよい仕打ちもやってのけた。それらの尋常ならざることどもは、このときの鬱憤が最初の発条になったにちがいない」。

### 【空海、遣唐使船乗船に滑り込みセーフ】

8 空海、三十歳、なお無名の僧である。かれが密教についての疑点を質すべく入唐しようとしたのは、いかにも唐突であった。かれが唐へ渡ろうと思ったとき、かんじんの遣唐使船は難波ノ津を出発してしまっていた。ところが、空海にとって幸運なことに、この船団は暴風に遭い、一行は京へ引き返した。かれはこのときからこの船に上るべく運動を開始した。「空海は、機敏であった」。「空海の得度の年については異説があって断定できないが、しかしかれが遣唐使船に乗ることを決意し、その運動を開始した時期にあわただしく得度し官僧になったというほうが、空海におけるなりゆきや人柄においてむしろ自然であろう。かれのいそぎの得度を可能にしてくれるだけの身の支持者を、かれはこのころには多く持っていたはずである」。遣唐使船乗船についてもまたしかりである。

### 【長期留学生の空海と短期還学生の最澄、遣唐使船乗船時の身分の差】

9 空海の身分は、留学生で、むこう二十年、唐に留まる。その二十年間の生活費が官給されてもいいのだが、不十分で、多くを自前で調達せねばならなかった。一方、最澄は完成度の高い僧が命ぜられる短期の還学生であった。国家が最澄に「かの地の天台の体系を移入せよ」と命じて渡唐させるもので、移入のための入費は公私それぞれから潤沢に出ていた。

### 【密教の法統を受け継ぐとはどのようなことか？】

11 空海が唐の都、長安にいたのは、804年12月末から806年3月までの、  
5 わずか一年数ヶ月です。この間の、805年6月から8月にかけての3ヵ月  
17 ほどの間に、純密の正系を伝える青龍寺の恵果和尚から、胎蔵界灌頂、  
金剛界灌頂、更に伝法阿闍梨位の灌頂を受け、第七祖恵果阿闍梨について、第八祖阿闍梨となりました。灌頂を受けるとはということ・儀式なのか、どうしてそんな短期日に灌頂を受けることができたのか…。

たいそうかいまんだら 胎蔵界曼荼羅 中央は大日如来 曼荼羅は全宇宙 悟りへ導く視覚装置 →



### 【空海、最澄が最初の密教相承者であることに驚愕！】

18 空海は、長安をあとにし帰国の途に。途中越州(紹興)に寄る。「空海は竜興寺に順暁を訪ねたであろう。そのとき、空海は当然、以下のような重大な話をきいたはずである。「日本僧最澄がきた」。「空海は、腹の中に氷塊をほうりこまれたようなおどろきをおぼえたであろう。空海だけが密教の相承者でなく、最澄もそうだということになる。しかも、最澄は早く帰国した」。「空海にすれば、日本に密教を将来する最初の人としての栄誉は去った、ということになる」。しかし、空海に救いがあった。「順暁は恵果のように密教の正統の継承者でなく、いわば傍流の人であった。最澄もまた、密教を受ける下準備はなにもできていなかった」。

空海は帰国船上、「桓武天皇崩ズ」の情報に接します。帰国後、空海と最澄の交流が始まりますが、溝(みぞ)ができ、だんだん深まります。ダイジェストはここまでとさせていただきます。ご一読を!

## 『空海の風景』付録—司馬遼太郎の筆法—

## 【空海は、日本史上類のない大山師】

821年、空海が満濃池の修築別当として、讃岐国に赴くくだりである。

空海は入唐(にっとう)までは無名の僧であった。しかし入唐し、帰朝してのちは空海をとりまく事情は一変した。すでに長安に渡来していたインドのもっともあたらしい宗教である密教が、かれによって根こそぎ日本にもたらされた。この築池にまねかれるころにはその盛名をきかぬ者はないほどにまでなっていた。

「ああ、あの築堤なら私にできるだろう」

と、空海はかれらの前でつぶやいて、かれらをご躍りさせたかもしれない。

——だから、ぶらりと行ってやろう。

とは、空海はいわなかった。空海のずるいところであり、もし空海が大山師とすれば、日本史上類のない大山師にちがいないという側面が、このあたりにも仄みえるようでもある。

(中公文庫版『空海の風景(上)』p. 16、17)



## 【空海、歴史の舞台に登場】

空海たちが乗った第一船は福州長溪県赤岸鎮に漂着し、そしていきなり山場となる。漂着地の地方長官・福建観察使閻濟美(えんせいび)への嘆願がそれである。大使藤原葛野(かどの)麻呂は観察使閻濟美あてに三度、嘆願書を書くも反応がない。四通目を空海が代筆し、事態が一変する。

福州の役所にあつて閻濟美はこの一文を見ておどろいた。長安の翰林学士でもこれ以上の文章を書けるとは思えず、それが、湿沙の上にあつて悲歎に暮れている異民族のひとりが書いたということと思えば、驚歎以上のものであつたであろう。

空海のこの文章はあざとすぎるようである。

空海が、唐の大官をおどろかすほどの文章力をもっていながら、私かに蔵して、大使の葛野麻呂のうろたえる姿を見つつ、手をさしのべなかったについて、かれの奥床しさと見るのは、空海性格からやや遠い、空海の生涯の行蔵からみて謙虚という、都会の美德はもっていなかったとおもわれる。かれがのちに謙虚さを見せる言動が多少あるにせよ、それは駆引きからくる演出にすぎなかったであろう。

空海は、のちのかれの行蔵からもうかがえることながら、自分の行動についてはすぐれた劇的構成力をもっていた。かれの才能の中でいくつか挙げられる天才や異能のうち、この点がもっともすぐれたものの一つと

(p. 271-273)

## 【恵果(えか)は空海を見るなり笑みを含んで喜歓し「大好(ターハオ)々々！」】

804年暮、長安に入ってから空海の行動である。

西明寺(さいみょうじ)で起居している空海は、当然、毎日のように恵果のことを考えている。(いきなり、法統を譲ってもらうということにならないものか)

と、考えたのではないか。

恵果は、空海が長安に入ったとき、あるいはそのあと西明寺に住して以後、その入唐の目的と、その異能をしばしば耳にしたであろう。

このあたりに、空海がただちに青竜寺に参趨して恵果の門をたたくことをしなかった機微を見ることができるかもしれない。

空海の長安における評判は日ごとに高まった。

さらにかれ(空海)の仏教あるいは密教についての造詣が西明寺の僧たちを驚かせていたことも、恵果の耳に入っていたはずであり、そのことを思えば、恵果は空海が自分を訪ねてくる以前に、すでに空海について豊富な知識をもつに至ったかと思える。であればあるほど、恵果において空海の来訪を待ち望む気分が昂じて行ったに相違なく、一方、空海においては、恵果の気持ちがそのように昂じてゆくの待っていたのではないか。それがために、空海は、五ヶ月近くも、恵果を、いわば置きっぱなしにしていたのであろう。

空海という人物のしたたかさは、下界のそういう人情の機微の操作にあつたといえる。

『御請来目録』において、自分(空海)は恵果に偶然遇つたのだ、としている。

しかし、「密一乗」を求めて入唐した者が、密一乗の最高権威である恵果にたまたま遇つたということは、あまり正直であるとはいえない。この文章の不正直さのなかに、むしろ逆に、空海のけれんじみた操作が匂い立っているといえる。

(p. 354-368)

恵果は空海を見るなり、笑みを含んで喜歓し、「大好々々！」と言つた。

## 『空海の風景』付録—司馬遼太郎の筆法—(続)

## 【桓武天皇崩ズ】

空海は、帰国船上、「桓武天皇崩(ほう)ズ」の情報に接する。

(最澄は、こまっているのではないか)

という感想が、おこらなかつたとは言いがたい。空海は政治的感覚のするどい性分であり、桓武天皇が最澄の学才を愛することが篤かつたことをかれは知っているのである。最澄は、桓武天皇という保護者をもたなかつたならば、唐へ請益の大任を帯びて渡ることも、あるいはなかつたかもしれない。(『空海の風景(下)』p. 68-70)



## 【空海と最澄、その交流と溝(みぞ)】

最澄の密教は、空海の帰朝とともに、その粗漏さが露れた。この後始末をするうえでの最澄の態度は率直というほかない。かれはたれよりもまず自分自身がその粗漏さをみとめた。

最澄、海外ニ進ムト雖モ、然レドモ真言ノ道ヲ闕ク

と、弘仁3年(812年)11月19日付で、自分の保護者である藤原冬嗣に手紙を書いていることでもわかる。この手紙は、以下のようにつづく。「留学生海阿闍梨(空海)ハ幸ニ長安ニ達シ、具(つぶさ)ニ此ノ道ヲ得タリ」。であるがゆえに新帰朝の空海に学びたいのだ、というのである。痛ましいほどの謙虚さといっている。『仁和寺記録』には弘仁2年2月14日に空海に書状を送り、

和尚、モシ無限ノ恩ヲ垂レナバ、明日、必ズ参奉セン。伏シテ乞フ、指南ヲ垂レ、進止セヨ

といったという。かれ(最澄)は空海が持っている密教に焦がれ、その教えをうけるためには、ほとんどなりふりをかまわぬような様子を示しつつづけている。

最澄はさらに空海から灌頂(かんじょう)をうけることも乞うた。

「灌頂ですか」

空海は、内心おどろいたに相違ない。最澄自身が国家から命ぜられて宮廷の大官や奈良の長老たちに灌頂をおこなったのは、わずか六年前ではないか。その最澄が、師である壇からおりて空海を師とし、灌頂を乞うているのである。

この最澄の態度は、空海を満足させたにちがいない。

「いいでしょう」

空海の表情が、目にみえるようでもある。

空海が長安で恵果から受けた灌頂は、まず胎蔵界灌頂、次ぎに金剛界灌頂、そして三つ目が伝法灌頂であった。ところで、812年、最澄は高雄山寺で空海から二度灌頂を受けている。しかし、11月は金剛界灌頂、12月のは胎蔵界灌頂で、彼が期待していた、すべての法を伝える伝法灌頂ではなかつた。

最澄ほどの大家に対しておこなうのは、当然この伝法灌頂でなければならず、最澄もそれを期待したであろうが、実際にはそうでなかつた。最澄は落胆した。

しかし、最澄は空海のもとに使いを出し、経を借り出し続けた。

——私は伝法灌頂を受けられないのか。

幾月ニカ合得セン

空海は、答えた。

三年ニ、功ヲ畢ラン

三年かかります、と空海はいうのである。

最澄が、しおれてしまっている姿が見えるようである。

このあとも、空海は最澄に伝法灌頂を授けず、断交に近い状態に入る。その原因は、空海が最澄に対する「あくの強い仕打ち」だけでなく、密教を筆授で学び取ろうとする最澄の姿勢にもあつた。

(p. 228-230、237、245、246、248)

高野山を修禅道場とした空海は、東寺を都での拠点、

・密教の根本道場とした。→



## 東寺の基本情報

東寺真言宗の総本山。唐で新しい仏教・密教を学んだ空海により、日本最初の密教寺院となった。現存する平安京唯一の遺構。1994年、「古都京都の文化財」として世界文化遺産に登録された。

所在地：京都市南区九条町1「アクセス」JR京都駅下車徒歩約15分、近鉄「東寺駅」下車徒歩約10分、市バス「東寺東門前」下車すぐ